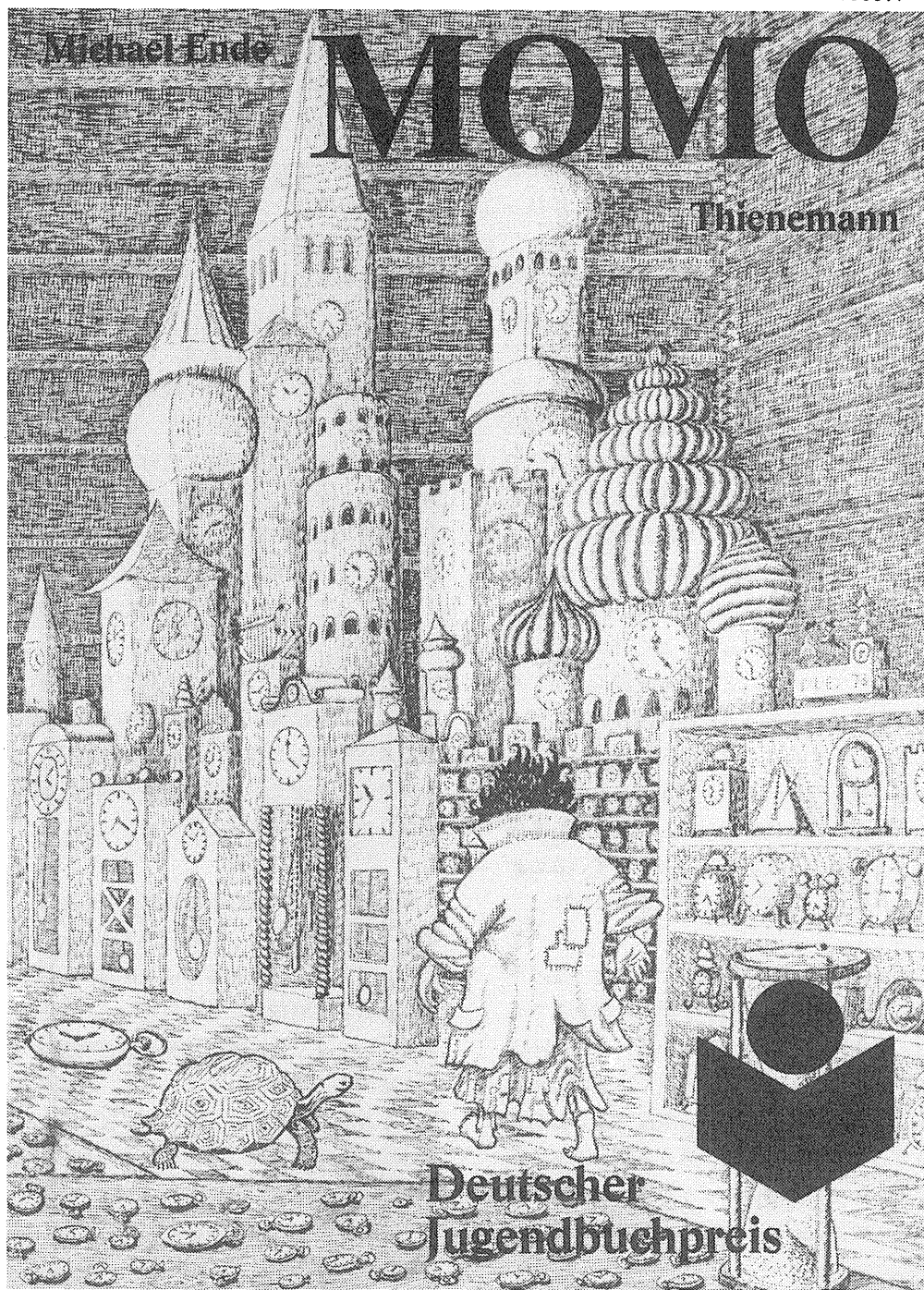


1988.7



“無題”

道家建二郎

“電車の中で本を読んでいるのを見ると大部分の人が書店などのカバーを付けている。せっかく苦心して装丁しているのに隠してしまうのはけしからん。わしなんかすぐにひっちゃぶいてごみ箱にポイしちゃうもんね。”とまあそのような話を読んだ事がある。実際本を買うと、当然のように本の表紙の上に色付きのカバーが付き、更に俗にコシマキというけばけばしい幅の狭い紙切れが付き、そのうえ全体を書店の包紙で覆ってしまうわけだから、むだと言ったら確かにむだだと、ぼくも思います。でも何だか少しちがうようなきもします。また“あの本は絶対おもしろい。ぜひ読みなさい、私は読んでから人生観が変わりました、あなたも変えなさい。”とか大声で叫んでいたりと、なんだか恥ずかしくなります。今までどんな本を読んだか、今何を読んでいるか、誰の小説が好きかについて、人に話すのは、何だかわけもなしに恥ずかしいな—と思います。皆が何とも思わないとすると、ぼくは、もしかしたら恥ずかしいな—と思うような本の読み方をしているのかもしれない、とまた恥ずかしくなります。

ところで、どうも僕は活字中毒者のようです、物心の付く前から本を読んでいたような気がします。もっとも物心の付いたのは小学校の五年生ぐらいで、それ以前は人間してなかったようです。今なら自閉症だとか言われるでしょうが、当時は、単なるアホかあるいは変な子で済んでいたようです。友達と一緒に遊んで遊ぶわけでもなく、テレビ、ファミ

コンがある時代でもなかったので、親父の岩波文庫を引っ張り出しては読んでいた記憶があります。今から思うと、それらの本は大部分が戦前の物なので難しい漢字がやたら沢山出て来て読めるはずもなく、単に字面を追っていたのだと思います。意味などわからなくてもいいのです、何が書いてあるか理解できなくても良いのです。結局は単なる暇つぶしだったのかも知れません。とにかく今までメチャクチャな読み方をしていた気がします。このごろはそれでも暇がなくなったのと若干お金が出来たのと、最大の理由は年を取って目が見えなくなってきたので、少しずつ読む本の範囲を狭くしています。とにかくやたらに忙しい時、むしろに小説が読みたくなります。少なくとも僕にとって、面白い小説、物語は、その本の中に繰り広げられる、現実にはない世界に、すんなりと入って行けて、しかもその世界が何となく居心地が好いものだと思っています。そんな世界なんて、もちろん在りはしないし、でも、なんとなく夢っぽかったり、憧れだったりして、いいな—、てなことを思いつつ読んでいるような気がします。この様に書くとか確かに気持ち悪いですね。本当は読んでいる時には、無条件でその世界に没入出来て、読み終わったら何にも残らない、そんな小説がいいですね。

当たり前だけど、本の中に描かれている事って全くイメージーションの世界ですよ。すばらしい作家がありとあらゆる形容詞、副詞を総動員して料理のことを表現しようとしたって、しょせん、私達の感覚を直接刺激することは出来ませんよね。それでも、特定の作家の小説を好んで読むというのは、その作家のつくり出すイメージーションの世界と親和性があるって事だと思うわけです。なんかのことで、ちょっと小説の話になって同じ作

家がとても好きですと言う人が居たりすると、
なんだかお臍の当りがほんのりと温くなる
ような気がしませんか。だから今まで誰の小
説を好んで読み、今何を読んでいるかを他の
人に知られるのが恥ずかしいな—と思うのか
もしれません。人から顔を見られる。これ
は、しょうがありません、だけど自分の思っ
ていることが、すべて他の人に分かってしま
ったら、恐いな—、恥ずかしいな—と思わな
いですか。例えば、前からすごくグラマー
な女性・・あ・この例はまずいな。例えば懷
にドスをのんでいるヤ組の人に行き遭ったり、
現金を運んでいる銀行員に遭った時に、自分
の考えていることが、そっくり相手に判った
りしたら、どうなると思いますか。

この頃、脳の働きを解明しようという研究
者が大勢出てきました。そして人間の意識構
造にも手がつけられ始めました。怒る、悲し
む、喜ぶ、この様なき脳の中の部位がアク
ティブになるかだんだん判ってきたのです。
逆に言うと脳の色々な部位の活動を見れば、
その人の精神的な状況が判ってしまうかも知
れないのです。人が何を思っているかを時の
権力者は常に気にします。そして何とか思う
事をコントロールしようとしてきました、支
配者は行動をコントロールする十分なノウハ
ウを持っています。でも今までは思想をコン
トロールする最も有力な手段としては、言論
の自由を抑え出版を規制することだったと思
います。脳や神経の働きを解き明かすことは、
それ自体は素敵に面白いことだと思えます。
でもどこかで、だれかが、ねらっているよう
な気がします。敵に対応するには、色々な本
を読んでやたらに色々なことを思っちゃって機
械を混乱させるより他はないかも知れません。

僕、椎名誠の世界って好きです。(生物学)

＝＝＝ お 知 ら せ ＝＝＝

□ 夏休み中のお知らせ

夏期休暇中の開館、貸出等については下記
のとおりとします。

1) 長 期 貸 出

貸出期間 7月18日(月)～9月24日(土)

冊数制限はありません。

(但し、雑誌は対象外です。)

2) 開 館 時 間

7月25日(月)～9月14日(水)

平 日 午前9時から午後5時まで

土曜日 午前9時から午後1時まで

3) 閉 館

8月1日(月)～8月20日(土)

□ 前期試験に備えて

1) 開 館 延 長

7月9日、16日の両土曜日は午後3時
まで開館します。(平日は午後6時まで)

2) 一部図書の貸出期限変更について

試験期になると、一部の図書に利用が集
中しがちです。このため、予約の多いもの
に限り、一夜貸し、三日貸し等の措置をと
ることがあります。

時間について

重 野 純

今年度も新入生を迎えて3ヶ月余りが過ぎようとしている。この3ヶ月を長いと感じる人もいだろうし、短いと感じる人もいだろう。そこで今回のエッセイでは、時間の流れについてのわれわれの感じ方について考えてみることにしよう。

われわれは苦しい体験をしている間は、まるで「牛歩のように時の経つのが遅く」感じられるのに対して、楽しい体験をしている間は、まるで「飛ぶように時が過ぎていく」と感じられる。物理的には時間の流れるペースは一定であるのに、心理的には時間の流れを速くも遅くも感じることができる。物理的な時間に対して、われわれの感じる主観的な時間の経過は心理的時間とよばれる。

それでは苦しい体験はいつまでも長い時間としてわれわれの心の中に残り、楽しい体験はいつまでも短い時間としてわれわれの心の中に残るのであるだろうか。どうも逆であるように思われる。「あんなにも苦しくて長かった時間」が、後になって振り返るとほんの一時のように感じられたり、「あんなにも楽しくまたたく間に過ぎてしまった時間」が、後では長い充実した期間のように思い返されるのではないだろうか。どうして逆転してしまうのだろうか。これはどうもわれわれの記憶と関係がありそうである。

精神分析の立場では、忘却は無意識的な「抑圧」によって生じると考える。「抑圧」とは専門用語であり、受け入れ難い観念などを意

識しないようにすることである。この説に従えば、「苦しい体験」は抑圧されてしまい、1つ1つの体験をわれわれは容易には思い出せないことになる。それに対して「楽しい体験」については抑圧は生じないから、細かな体験まで鮮やかにわれわれの記憶の中に残っていることになる。このことは、嫌いな人の名前や住所などを忘れやすいのに対して、好意をもつ人の誕生日や趣味などをよく覚えているといった日常経験を思い返せば、容易に理解できるであろう。

ここで図1を見てほしい。左図の2点間の距離と右図の両端の点の間の距離は等しいのだが、われわれの目には右図の方がその距離は長く見える。これは錯視の一種で分割錯視と呼ばれるものであるが、上述した記憶についての体験にも、同じことが言えるのではないだろうか。すなわち、たくさんの思い出がある（＝分割されている）と長い時間に感じられ、ほとんど思い出がない（＝分割されていない）と短い時間に感じてしまうのである。そこには何か共通の原理が働いているように感じられて面白い。

ところで、子どもと大人とは、時間の流れに対する感じ方が異なるということをご存知だろうか。子どもはもともと有する主観的な時間が短く、それと比較をするものだから、実際の時間の流れをのろく感じる。それに対して、年をとるほど主観的な時間が長くなるため、それを基準として判断される実際の時間の流れを大人は速く感じてしまうというの

ある友人から、「金持ちはお金を浪費するが貧乏人は時間を浪費する」ということば

最後に、私は学生の皆さんが、何年後かに
本学で過した日々をととても長い年月のように
思い出すことができれば、素晴らしいことだ
と思っている。(心理学)

• • • • •

図書館を利用する時には、閲覧証が必要です。まだ受け取りに来ていない方は、教養図書館カウンターまでいらして下さい。

教養図書館利用実態調査集計結果報告

1. 調査対象と実施方法

第1回 昭和62年12月7日(月)

～12月11日(金)

第2回 昭和63年1月19日(火)

～1月20日(水)

第3回 昭和63年5月17日(火)

～5月18日(水)

教養図書館入館者全員に、都合3回に渡って右記の簡単な形式でアンケートをお願いしました。

2. 集計結果

一週間のうちで利用の集中する火曜日・水曜日を抽出し、第1回を平常時、第2回を試験前、第3回を新入生時として比較したのが右表です。

利用場所では、半数以上が閲覧席(座席数120席)に集中し、利用時間帯は、12時から13時のお昼時にピークを示し、順次線下がっています。

また滞在時間でみると、30分以内の利用者が全体の約40～50%(その内の約半数が5分以内)、30分から1時間以内の利用者が15～20%で、1時間以上の利用者は40%となっています。試験前になると、中には4時間以上(12人で約3%)も図書館で生活をしている人がいました。

図 書 館 利 用 調 査

Q あなたの所属は？

学 生 ・ 院 生 ・ 教 員 ・ 職 員

Q あなたの利用した場所に○印をして下さい。

1 閱 覧 席

2 書 架

3 参考図書コーナー

4 雑誌コーナー

5 そ の 他

退館時間	時	分
入館時間	時	分
	時	分

以上簡単にまとめた結果をお知らせすると共に、この場をかりて調査に際しての皆さまの御協力にお礼申し上げます。

教養図書館利用実態調査集計表

年・月・日	平 常 時				試 験 前				新 入 生 時			
	62.12. 8(火)		62.12. 9(水)		63.1.19(火)		63.1.20(水)		63.5.17(火)		63.5.18(水)	
	(人)		(人)		(人)		(人)		(人)		(人)	
回 収 数	255	100%	255	100%	401	100%	445	100%	151	100%	169	100%
学生・院生	242	95%	245	96%	382	95%	430	97%	137	90%	157	93%
教員・職員	13	5%	10	4%	19	5%	15	3%	14	10%	12	7%

利用場所												
1.閲覧席	133	52%	139	55%	219	55%	239	54%	85	56%	113	67%
2.書架	45	18%	50	20%	49	12%	57	13%	26	17%	21	13%
3.参考図書コーナー	20	8%	16	6%	34	8.5%	40	9%	4	3%	9	5%
4.雑誌コーナー	27	10%	18	7%	18	4.5%	16	3%	16	11%	14	8%
5.その他	30	12%	32	12%	81	20%	93	21%	20	13%	12	7%

利用時間帯												
1. 9時～10時	6	1%	14	3%	19	3%	15	2%	13	6%	8	3%
2.10時～11時	20	4%	48	11%	91	11%	118	14%	38	16%	29	9%
3.11時～12時	30	7%	44	10%	94	11%	96	12%	30	13%	27	9%
4.12時～13時	95	21%	79	18%	131	16%	169	20%	45	19%	63	21%
5.13時～14時	83	19%	74	17%	99	12%	140	17%	15	6%	59	19%
6.14時～15時	106	24%	79	18%	153	19%	134	16%	28	12%	56	18%
7.15時～16時	38	8%	16	5%	108	13%	38	5%	21	9%	14	5%
8.16時～17時	43	10%	50	12%	89	11%	70	8%	27	12%	35	11%
9.17時～18時	27	6%	25	6%	35	4%	53	6%	16	7%	15	5%
利用延べ人数	448		429		819		833		233		306	

滞在時間												
1. 5分以内	40	16%	42	17%	77	19%	109	25%	27	18%	34	20%
2.30分以内	70	27%	77	30%	93	23%	103	23%	53	35%	37	22%
3.1時間以内	43	17%	34	13%	64	16%	68	15%	34	22%	32	19%
4.1時間以上	102	40%	102	40%	167	42%	165	37%	37	25%	66	39%

☆ 教養図書館現有蔵書数と昭和62年度貸出数

(昭和63年3月31日現在)

蔵書数(冊)	比率(%)	主 題	N D C	貸出数(冊)	比率(%)	貸出数 蔵書数(%)
4,148	6	総 記	000	54	0.7	1
5,994	8.5	哲 学	100	661	8	11
6,694	9.5	歴 史	200	231	3	3.5
10,086	14	社会科学	300	566	7	6
18,043	25	自然科学	400	4,627	58	26
2,170	3	工学・工業	500	240	3	11
1,037	1.5	産 業	600	21	0.3	2
4,366	6	芸術・体育	700	237	3	5
3,823	5	語 学	800	144	2	4
13,471	19	文 学	900	960	12	7
1,818	2.5	未 分 類	新書他	207	3	11
71,650	100	合 計		7,948	100	11

上記の表は、去年一年間の貸出数と、蔵書数に対する貸出数の比率です。

教養図書館にしかない多数の図書が、まだまだ利用もされずに眠っています。

一年生の間に、より多くのジャンルの図書に触れてみませんか。

下表は、学年別の貸出比率を表にしたものです。

☆ 昭和62年度 学年別(所属別)貸出比率

	単行本(冊)	雑 誌(冊)	合 計(冊)	比 率(%)
1 学 年	5,577	173	5,750	(80)
上 級 生	1,369	72	1,441	(20)
学 生 計	6,946	245	7,191	85
教 職 員	1,002	279	1,281	15
合 計	7,948	524	8,472	100

フィリップ・ボーサン

『石と信仰とのたわむれ』

小 野 健 一

「初心忘るべからず」という世阿弥の有名な言葉がある。結婚披露宴などによく出てくる言葉で、勝手に解釈して都合のよい意味に使われているが、本当はどんな意味の言葉なのだろうか。書評に入る前に、まず「初心忘るべからず」にちょっと触れさせて頂く。世阿弥については『教養部紀要』20号（1986年）に伊藤幸子先生の良いエッセーがあり、ことに「初心」は精しく検討されているから、繰り返しになる嫌いはあるが、問題を「初心忘るべからず」だけに限って、私なりのコメントをするのをお許し頂きたい。

さて、世阿弥が初心というときには、それは「この初心もののめが」というときのあの初心、つまり「未熟さ」「素人っぽさ」という意味の初心で、「始めの情熱」という通常の解釈が期待するような肯定的なニュアンスは全くない。これが先ず注意すべき点。次に「初心忘るべからず」の初心であるが、この初心を文字通りに取って「未熟さ」「素人っぽさ」だけの意味に解したらそれは間違いで、「初心ものの演技」とか、「初心ものの演出」とか、あるいは「初心ものの能楽理解」とか、そんな類のもっと立ち入った内容の語句の簡潔な表現と見るのが妥当であろう。

問題は「忘るべからず」のべからずで、私はこれを不可能の意味に取りたいところなのだが、能楽の小山弘志先生に伺ったところ「不可能と取るのは無理だろうね。矢張り禁止と取るべきだろうね」ということだったから、お言葉に従って素直に禁止と取ることに

しよう。

すると「初心忘るべからず」はどんな意味になるだろうか。「初心もののたどたどしい演技や演出も、それはそれで仲々良いものだよ」と言うほどの意味に取って良いのではなからうか。これでは披露宴のスピーチにはなりそうもないが、彼の「花」の美学の延長上にある言葉として首肯できる解釈にはどうやら辿りついたようである。

こんなことを考えているときに、図らずも上述の世阿弥の美学にぴったりあてはまる本に出合ったので、ぜひ紹介したくなって仕舞った次第である。前置きが長くなったが、本書はロマネスクを、ゴシックの完成に対する初心の美として捉える。著者に言わせると、ゴシックとちがって、ロマネスクという様式はない。工人たちは、個々の聖堂ごとに、要求される機能を持つ建築物を建て上げるのに必要な構造を、毎回あらためて模索しなくてはならない。完成したルーティーンを持たないことがロマネスクの特徴であり、この模索から独特の美が生まれる。それがロマネスクの魅力だと著者は言う。

誠に明快なロマネスク観である。一読して目から鱗の落ちる思いであった。但し、論理明快と言っても、いわゆる美術史家の冷たい解説を想像しないで頂きたい。これはロマネスクを深く愛する一つの魂が詠い上げた讃歌とでも言ったらよいだろうか。読後にしみじみとした感動の余韻を引く好著である。

（物理学）

『石と信仰とのたわむれ—ロマネスク芸術の魅力』

フィリップ・ボーサン著 小佐井伸二訳 白水社

1987年8月発行（70204/B31）

『モモ』によせて

石 多 正 男

小さなモモにできたこと、それはほかでもありません、あいての話を聞くことでした。なあんだ、そんなこと、とみなさんは言うでしょうね。話を聞くなんて、だれにだってできるじゃないかって。

でもそれはまちがいです。ほんとうに聞くことのできる人は、めったにいないものです。そしてこの点でモモは、それこそほかには例のないすばらしい才能をもっていたのです。

モモに話を聞いてもらっていると、ばかな人にもきゅうにまともな考えがうかんできます。モモがそういう考えを引き出すようなことを言ったり質問したりした、というわけではないのです。彼女はただじっとすわって、注意ぶかく聞いているだけです。その大きな黒い目は、あいてをじっと見つめています。するとあいてには、じぶんのどこにそんなものがひそんでいたかとおどろくような考えが、すうっとうかびあがってくるのです。『モモ』（ミヒヤエル・エンデ作 大島かおり訳、岩波書店刊 P. 22より）

私事でまったく恐縮だが、ぼくは先日窓をした。

あるスーパーに買い物に出かけた。少々暑かったので、アイスクリームを買おうと思ってその棚に行くと、ある女の子がそこからアイスクリームをいくつか取り出しているところであった。ぼくはその後ろで黙ってじっと待っていた。一心にアイスクリームに集中していたのか、ぼくにはなかなか気がつかない。やっと気づくと、といってもぼくの顔は

見ずに「あ、すみません」と言って、レジの方へ歩いていった。アイスクリームは家までの道を考えると解けるのを心配して最後を買うのがいい。ぼくもそうしたが、その子もそうした。レジでなにやらアイスクリームの割引券のようなものを見せている。きっと母親からのお使いをしているのだな、なかなかいい子だなと妙に感心してしまった。断っておくが、女の子と言っても小学校5、6年生というところだ。女の子も高校生以上になると、もしこちらが関心を寄せて見ていると気づくものだが、この子はまったく気がつかなかった。そこがいい。そのあと、自転車で一人帰っていくのが見えたが、いい子に育っているな、とまた一人勝手に感心した。またそのうち見かけるかな、とも思った。

まったく勝手なこじつけで、このような公の文章に記すのはぼくにもある良心のかけらが心のどこかで「やめとけ」と言っているのだが、それでもあえて書きたい。ぼくのこの窓にある「無言劇」がモモの非凡な才能と通ずるものがあるのではないか。相手の話なり、まなざしに黙って答える。これはすばらしいことだ。それで会話が成り立つ。あらゆる生活騒音に苦しめられながらぼくらは暮らしている。ぼく自身もそうだが、どの人も話す言葉のスピードがどんどん速くなる。おしゃべりで、ネアカが人々の注目を集める。そんな中で、一人黙ってただあいての話を聞く。言葉による表面的な会話より、無言の心の会話のほうがどんなに人の心を豊かにしてくれることか。『モモ』はすばらしい。（独語）

『モモ』ミヒヤエル・エンデ作 大島かおり訳 岩波書店 1976年9月発行(943/E59)

閲覧ニュース55号

1988. 7 発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里1-15-1

発行責任者 手塚

甫

電話 (0427) 78-8005